

改訂第2版 監修者の序

2004年の2月に発行した本書の初版は、思いもかけず好評で第4刷を重ねるまでになり、医療ミスをはじめとした医療の諸問題の関心の深さを改めて実感いたしました。この度、医療環境など様々な社会情勢の変化を鑑み、改訂版を発行することにいたしました。いくつかの追加事項、削除事項に加え、医師としての心構えや態度についても注意を喚起することで、医療に対する国民の信頼の回復や医療レベルの向上にも寄与できると考えました。

今、日本の医療は大きな転換期にあります。改革の方向と手段を間違えると医療が崩壊する危険性を孕んでいます。現在の日本の医学教育や医療体制にも様々な問題点があり、現状では医師の偏りも社会問題になっております。その背景には様々な要因が考えられますが、将来は質の高い医師のみが必要とされるようになっていられると思われれます。質の高い医療を提供する良い医師が、患者と医療の専門家から選ばれるのは、いつの時代でも変わらないことではありますが、近年では医療機関全体の質が評価され、公表される時代となり、医療機関が淘汰される時代を迎えることは間違いないと考えております。

また、医療界は患者の医療消費者としての権利意識の高まりにより、種々の問題が提起され、変革が求められております。これは医師と患者の関係が一般社会同様に、並列な人間関係に近づいてきたことの兆しと考えるべきですが、その一方で医療側にも患者側にも過剰な反応が起き、一部ではその関係を歪める事態も生じており、憂慮すべき状況も認められます。

不確実性を内在する医療については、国民の理解や意識改革も必要ですが、まず医師が医療内容を患者に理解できるよう十分説明し、患者の納得に基づいて毅然とした態度で医療を行えば、医療不信の問題は起こらないと考えられます。すなわち、医療を行う上には医師と患者の信頼関係が非常に重要で、それには医師が患者と同じ目線で話し合うこと、患者の視点に立つこと、信頼できる医師の姿勢を示すことが求められております。

本書が若手医師のみならず、第一線の臨床現場で働いている先生方に、少しでもお役に立つことができ、日本の医療が一步でも前進することを心から願っております。

2007年3月

武蔵野赤十字病院病院長 三宅祥三

改訂第2版 編集者の序

「十年一昔」という言葉があるが、最近の医学・医療の進歩は目覚しく、医療を取り巻く社会環境もかなりの速さで変化しており、十年前の医療が遠い昔話のように感じることもある。1990年代の米国でみられた“blaming and punishment”の風潮がわが国でも広まるかは定かではないが、この十年で医療を見る目はさらに厳しくなっている。

すべての医療者は、たとえヒポクラテスの誓いを忘れたとしても、“患者さんに悪くて有害と知る方法を決してとらない”ことは当然として日常臨床に従事しているはずである。しかし、大変残念なことに人は過ちを犯しやすく、しかも過ちは繰り返される。その事は医療においても同じである。

本書は日常臨床で発生する小さな医療ミスが少しでも減らし、患者さんに傷害を与える機会を減らすよう、そして医療ミスが減り不利益を被る患者さん・ご家族・友人が一人でも減ることを願って編纂されたものである。

初版を発行してから予想外の反響があった。録音図書や外国語翻訳の要請もあり、編者として多くの人の関心を得たことを嬉しく思うと同時に、同じような危機感を抱き予防策を講じようとしている同志が多数いることに励まされる思いでもある。

医療を取り巻く社会情勢が変化しても、医療禁忌事項には大きな変遷などないと思われるが、初版発行後3年が経過してさらに追加すべき項目が生じたこともあり、執筆者の協力も得て改訂版を発行することにした。

改訂版では新たに医師の態度についても触れた。本来は医の倫理や心構えに通じるもので、医療禁忌事項とは異なる。しかし、IT化時代で人との接触機会が減少している現在では、あちこちでコミュニケーションエラーによるトラブルが生じている。医療の現場でもそれは例外ではない。

医師としての禁句その他を文章にしなければならないのは悲しいことでもあるが、訴訟の時代といわれる昨今では、医療過誤は無いにもかかわらず訴訟へ進展する事例が多数あり、その原因はコミュニケーションエラーにあると聞く。そうした誤解を防ぎ、患者さん・ご家族にも不快な思いを与えずに済むことを願って、医師の態度の項目を取り上げた。

新たになった本書をきっかけに医療ミスが1件でも減少することを願い、執筆者一同の思いに合わせ、ここに記す。

2007年3月

武蔵野赤十字病院総合診療科部長 長田 薫